

研究班報告 4 Global Studies Working Group

書評 近藤邦康著『毛沢東 実践と思想』
(岩波書店、2003)

内田 健二

「グローバル・スタディーズ」班は残念ながらここ数年間、統一テーマの下に共同研究を進める態勢を取ることができないでいる。その原因は、頻繁に開かれる学部学科内の諸会議のために研究会を持つ時間がきわめて制約されていることに加え、班員がそれぞれの専門的研究に精力を傾注し、しかもその研究対象が細分化されているために、具体的な問題関心の共有と統一テーマの設定が困難になっていることにある。

以上の事情から、今年度の班活動は低調に終わり、近藤班員の労作『毛沢東 実践と思想』の合評会を行うだけに留まった。そこで、合評会における話題提供として行った報告の概要を以下に掲げることで、班活動の報告に代えさせて頂きたいと思う。

はじめに

本書は著者のライフワークとも言うべき毛沢東研究の結晶であり、数ある毛沢東研究の中でも、思想の内在的理解と緻密な議論の運びにおいて群を抜いていると言って良い。本書は副題が示唆するように、毛沢東『実践論』に基づき実践-認識-実践のサイクルの中で毛思想を検証する方法を採っており、したがって、叙述は毛沢東論と中国革命史研究の重層的構造となっている。しかも本書は、特権批判と自由の希求といった積極面から文化大革命の再評価を主張している点で、他の多くの研究とは異なる独自の位置を占める。

とりわけ思想史家としての著者の持ち味は、青年期毛の思想形成に関する綿密な検討に遺憾なく示されている。それ故、この点に深く立ち入らない論評は不当との誘いを免れないが、ここではソ連スターリン時代を専門に研究している評者の立場から、もっぱら社会主義建設期の毛の政治指導を取り上げ、中ソ社会主義の独自性と共通性を如何に捉えるべきかについて考えたいと思う。

本書の問題関心と基本的枠組み

本書を貫く問題関心は、現在の中国が当面する諸課題を解決するうえで、毛の思想の継承と批判が不可欠となっているという認識にある。貧富の差や特権、差別など、文化大革命が直面した課題は現在さらに深刻化しており、それは早晩、毛の再評価をもたらさざるを得ないと言う。著者はその萌芽がすでに、文化大革命の夢と挫折を経験した紅衛兵世代が近年発表した研究に看と取れると指摘し、そのいくつかを紹介している。この意味で、本書は現代中国の思想的潮流の一側面を知るうえでも裨益するところ大である。

毛の思想と実践を内在的に理解すべく著者は以下の三つの視座を設定する (vii-ix 頁)。すなわち第一に「中国近代と毛沢東」であり、これは「救亡-民主」の課題への毛の取り組みに関わり、竹内好を継承する視点である。第二が「中国思想史と毛」という視点であり、これは西順蔵の研究を発展させ、「人倫と行」から「人民と実践」への思想的転換を照射することを可能にする。第三は「社会主義と毛」であり、和田春樹の「世界戦争の時代の社会主義」という時代認識から中国社会主義の歴史的特質を考察する視点である。

具体的内容の検討に入る前に、この第三の視点と関連して評者の疑問を一点述べておきたい。和田の「世界戦争の時代」論は、社会主義システムないしスターリニズムの戦時即応体制としての「適応力」を理解するうえで有効であり、評者もスターリニズムの基本的属性が、いわゆるロシアの伝統と並んで、時代によってソ連社会主義に押された「刻印」とも言うべきものであるとの理解に立っている。同時に、この時代論は自らの論理のうちに、時代が終わればそれとともに、その時代が生み出したシステムも基本的に崩壊せざるを得ないとの展望をも含む。そうであれば、

世界戦争の時代の終焉は、国家社会主義の指導原理であった毛思想の生命力にも大きな疑問符を投げかけるはずである。この点で評者には、和田の時代論を受容しつつ毛思想の再生に期待する著者の態度は必ずしも整合的ではないように思われる。もう少し詳しい説明が必要であろう。

本書はまず上記の第一と第二の視点から青年期毛の思想形成を取り上げ、孫文、李大釗、康有為、楊昌済などの諸思想のアマルガムとして毛を位置づける(10-14頁)。中でも著者は、西洋哲学と儒家思想の統合を図った楊昌済の影響を重要視し、レーニン主義の受容も毛にあっては全面的に他の思想に取って代わるものではなかったと示唆する。本書の斬新な点は、毛におけるこうした諸思想の雑居性への注目にある。思想の雑居性は毛の人物像と無関係でない。著者は彼を「社会連帯と個人独立の両極の激しい矛盾・対抗を強靱な自我によって持ちこたえている個性」、「大きな振幅で左右に揺れながら前進するエネルギー」と描き出す(34頁)。この人物像には毛に対する著者の思いが込められていると思われるが、新中国成立後の彼の政治指導を見る限り、言い得て妙の感がある。

著者は毛思想の出発点として楊昌済の影響である「精神の個人主義」と「民衆の大連合」を重視する。「民衆の大連合」論については「バラバラの砂」という民衆像と対比させつつすでに多くの論者が指摘しているが、それと併せた「精神の個人主義」の強調は著者独自の着眼である。しかし評者には、「精神の個人主義」の思想的内実、とりわけ自由主義との関係から見たそれが必ずしも判然としない。著者は毛が「自由に対する探求が不十分」であったとして、彼が後年、「集団主義と個人主義を絶対的に対立させる方面に傾斜した」と批判しているが(381-2頁)、それでは何故、「精神の個人主義」に存在した「人格独立の思想の萌芽」が開花し得なかったかが問われねばならない。

本書では触れられていないが、1937年の毛の「自由主義に反対する」論を読む限り、彼が自由主義思想について真摯に思索を深めた形跡は見られない。「自由主義の根源は個人の利益を第一に置き、革命の利益を第二に置く小ブルジョア階級の利己心にある」とする立論は、政治目的の観点から思想を断罪する点で、スターリニズムの下での「腐った自由主義」非難を彷彿させる。著者の指摘した上記の毛の弱点は、初期の思想に内在した弱点であったのか、あるいは俗流マルクス主義の階級論を受容した結果なのか、さらには権力の担い手としての機会主義の産物であったのか、掘り下げた議論が必要ではなからうか。

毛思想の最大の意義は、著書によれば、帝国主義に対する絶対批判を「人民・矛盾・大同」として定式化したことにある。このトリアーデは、資本主義に対するマルクスの絶対批判「プロレタリアート・疎外・共産主義」に対応する形で著者が整理した定式であり、本書の核心を成している。恐らく著者の意図とは異なるであろうが、評者はこの定式によって毛思想の特徴が端的に捉えられていると考える。それはマルクスと比較した場合に明らかなように、毛のトリアーデは、前二者の範囲と内容がその時々によって変化することを前提としているからである。「人民」の範囲は、たとえば民族ブルジョアジーや富農を含むか否かなど、その時々「矛盾」の性格に応じて大きく異なり、また「矛盾」それ自体もたとえば異論派知識人や劉少奇派を内部矛盾と見るか敵我矛盾と見るかなど、主要矛盾を何と認定するかによって闘争の動因としての性格を異にする。この柔軟性は戦略・戦術の変更を弁証するうえで大きな強みではあるが、反面、権力の論理の浸透を許す恣意性へと繋がることにもなる。この危険に対し毛が果たしてどこまで自覚的であったのか、本書の議論は必ずしも明晰ではない。

しかし本書がこの問題を等閑視しているわけでは決してない。それは「人民」理想主義と「実際」現実主義との結合と乖離という問題設定が、本書の重要な分析枠組みとなっていることから明らかである。著者は「持久戦論」を両者の結合の典型例として高く評価したうえで、毛の政治指導の一般的傾向を、抗日・革命期における結合と社会主義建設期における経済・文化面での乖離と特徴づける。そして大躍進などの悲劇は、毛における「実際」現実主義の低下と「人民」理想主義の独走に起因すると説く(270-1頁)。そうであれば当然にも、乖離の原因は何かの問題となろう。これに関し著者は、両者の結合を担保すべき「毛一党一人民」の循環構造の力量が低下したことを挙げる(341頁)。この指摘は重要だが、それではさらに、その力量を制約した原因は何か問われなければならぬ。

毛思想とスターリニズム

大躍進や文化大革命が象徴的に示すように、上記循環構造中の毛と党、党と人民、さらに毛と人民の諸関係はそれぞれ矛盾を孕んでいた。しかしながらその一方で、それらの矛盾を解決する制度的メカニズムは整備されておらず、その結果、矛盾の解決はそれまでに出来上がっていた諸関係を破壊する形で図られることになったと言って良い。そうであれば、問題は力量というより、むしろ循環構造そのものに内在していたと考えるべきであろう。

毛がこれらの矛盾を解決する権限を独占していたことは明らかである。著者は毛が政治領袖（皇帝の権力）と思想導師（聖人の権威）を兼ねた結果、儒教・王朝が崩壊した空白を埋める重い役割が、彼に異論への過剰な反撃を加えさせるに至ったと主張する（236, 261, 383頁）。では、毛はそうした自己をどのように捉えていたのであろうか。毛が権力者＝真理の体现者として自己を絶対化したという指摘（290-1頁）を見る限り、著者は彼が両者の兼任を原理的に正当化したと理解しているように思われる。そうであれば、兼任を正当化する思想はいつ頃形成されたのであろうか。権力者の口から「真理」や「思想」が語られる時、それらは権力的手段としての性格を帯びざるを得ない。ここでは「思想」の手段化ないし機会主義化が、思想そのものを構成する本質的な要素になると言って良い。

周知のように、権力と「真理」の独占とそれに基礎づけられた個人崇拜は、スターリニズムの基本的な属性であった。本書は「スターリン・モデルの中国化」という視角から社会主義建設期の毛の思想と実践を分析し、独自性とともにスターリン型との共通性を析出する。しかし著者が挙げる独自性の中には、「革命を掴んで生産を促す」方法のように、スターリン型の生産動員と基本的に共通する性格を持つ（むしろ、社会主義競争のような主観的能動性の動員は、外延的な成長段階にある経済では不可避と言うべきであろう）ものもいくつかあり、全体の論調として、本書はやや独自性の強調に傾きすぎた嫌いがあるように思われる。もちろん著者は正當にも、大躍進とソ連「上からの革命」の類似性や文化大革命の方法とソ連大テロルの論理との近接性を指摘する（268-70, 333, 375頁）。しかし、そうであれば、中ソの比較は共通性を基軸として論じられるべきではなかったか。何故なら、中ソにおけるそれら二つの出来事は、それぞれ両国のその後の政治システムに重大な刻印を残した最も重要な政治変動であったからである。そしてそこで決定的な役割を果たしたのは、それぞれ権力と「真理」を独占した毛とスターリンであった。政治目的への「思想」の従属と手段化、またそれを支えた政治システムの共通性こそが、毛思想とスターリニズムを対比する際の基本的視点に据えられるべきであったように思われる。

著者は結論部において、社会主義建設期における毛の思想と実践を、社会主義と資本主義、平等と自由、そして人民大衆と知識人の三つの関係に即して批判する（373-85頁）。その際、著者は毛思想それ自体の中に批判の立脚点を求めており、それ故、その批判は、毛思想の中で発展し得たはずのオルタナティヴを提示する内容となっている。この意味で本書は、いわば「真性」毛沢東思想による毛沢東批判の書であると言えるかもしれない。